

m

Diary (1950.3.11 →)

北大医学部

細野 順三

文部省撰定教育ノート 大學高専用

“偽らざるの記”

僕は長い間、日記をつけなかった。

心のゆとりが無かったのだ。

それと卒直に認めやう。

だが、今日は友を通して、人生を考へ
人生を証歌して、この青春の奥に

貴重なる何ものにも替え難い金剛石

である。古小事を身にしみて感じた。

そして深い反省と共に、あの感激的なる

白線四年の生活の基礎に立つ。この四年

(然し實際は余り三年の)医学生活こそ

花にも況して光彩を放つものであり、古小事

を知りて、反省をふし、中絶してゐた日記

(その生活の記録)を七ヶ月ぶりで記す事にした。

その名も“偽らざるの記”として。

一九五〇年三月十一日 午後十時三〇分

三十三才 順三記

愛するの

娘 子 5

人生の叔父の道に 孤杖を遺す
又悲しからず

雪解の野辺に春待つ草の芽を
見出し 僕の時 僕の時 胸は何かしら

生える 樹の根に一杯になつて来た
そつと 僕の手を握り 一緒に

見つかぬ 君の眼にも涙と共に
何のいらぬ女の光りおとした事と

見逃しはふかつた

一ね五〇三十一

囁云記

参月十一日(土)

人生を知った 共に学が 共に証し
語った友は 帰る行つた 果しかりしこの日であった

僕は寂しくはない

皆 泣きつきたい程 良き友である 皆 苦しいのだ

僕をけむけむいのだ とうして 若人は苦しむのだ

僕だけが 唯一人の 婉子を信じてゐると古事事は 深い

反省を要する 唯一人の 信じ切れる 男 と云ふもの 付いてく?

そつとして置きたい... その手つに

松井の心中も分る 俺が愛せられると云ふ事は いけない

事柄のたしと云つても 彼の心も 強いのだ

俺は今迄 謀も愛せられたと云ふを 城戸の心も

只一人 微笑が一つ 手を抑えて 記つて 平田の心も

皆 分る 皆 泣きつきたい程 良き友だ

床の中で 今頃は 音が やつてゐると思ひ その益会を

祈るおますよしと 昨日 言つておを 不参の 勝利の心も

結局は皆一つぶらだ 寂しいが 強い 勝利目なり

だけだ 僕は 二りの 幸福を そつとして置きたい

僕は 信じていゝをい 何時 如何なる 時にも 信じて切れる

困りでありをい その 気持を 掻き 乱しをくふ

そつとして置きたい... その手つに

金子様の小母様の良き方なり 僕らの 気持を 分つて

戴ける方なり 僕らは 甘えたいのだ。 それでいゝく

今日の三、企てを 感謝する 夫に よりよく 小母様に 感謝する

一 一学年卒業記念コンパを了えて

三月十二日(日) 聖日の朝を迎へ 心身共に爽かぶり

午前八時半より日曜学校 又十時より礼拝 その後役員会

三時より中里会と 遂に終日と 教会に過す

S.S.は 最終講義 マルコ伝十章に入り 復活のイエスを 訓えり

中善科一年共に学び共に睦みし彼らの授業も之で終る。

良し生徒であった。このまゝ生長して良き信仰の果を結んで欲しい。

年右のさゆり会。今後の在り方に就その座談会。之又活潑なる意見百出し結局 現在のさゆり会は三月を以て解散とする。そして

四月より新らしい会を創る事とする。余は白紙還元として中善科

由便、高善科、女学生を中心とする某会に奔展せしめる事に意見の一致を見る。 本日の出席の会員の意見活潑で良し

三月の余す期間の準備期間として 月居、細野両教師と相談役として

創会の胎動に入る事にする。 本日役員会(午前十時—三時)

のS.S 報告(教会の議に報告するも)と提出する。 奈良兄と三人の

アルバイトの成果あり。 良し 聖日と古くは 然り良し哉!!

余す一週間に於て本学年も最後あり。 フライトを出して頑張りべし。

帰省の日も近し。 雪、無い東京で良し休養を摂らん。

三月十四日(火) 降つては融け、くは降る。 道路がたまらな、

それだけども真夏擬鬱ぶ。 医学部おやノコく 通学は日全くの如

文句なし面白くない。 昨日も今日も只 顔を出してやると 過おふ、

昨日、専手会例会日 例の如し。 可哀そうであつたが 例

委員会の不手際等がどう 致し方ない。 矢張り一つの会口を以上会

に従ふべきなり。 今別も知らないのでありやう。 こととする以上、当然と思つ

るを 追究して 総会と流会にしようか。 又、後のアかべとエロス

の討論にしても 更にくむらひ。 琴似教員 専手会、知性、低

く暴露してや。 新刊書校生と云ふ。 女子会員と云ふ。 頭が悪い

才一俺達のやうな者に牛耳るてや。 なんてやらしかつてや。 余す

余す五日。 在礼生活。 又しても 南園の渡り鳥。 帰郷あり

娘すりの便りによれば 鶴川でも ココロ文らだが 風邪に感染し、その後

娘自身も九、廿度発熱五日伏床し、と云ふ。 盲体の弱、いゝあう大事

と云ふ。 娘すりの相妻が自虐性で 癒さないと見えぬ。

何の原因に分るゝ来とマニエリ一ツツ、ヒロ一可解アリ

三月十五日(水) 余す四日に迫り、愈々ラストスパイト、ダツンエトガホリ

児玉教授最終講義、春躰を終る。一応感傷あり、彼ら一講義に終始したからむ、生理の朴沢教授、講義は一番權威あり

と此に彼の外国仕込みの身躰も、敬意を表すに足る

午名、解別実習日、余す三日不志、脊側を一気にススすめる

フイトと出ると全部、ハムもと水も、猛烈な身入さむ、お陰で、帰宅して

お湯でいらいすすも、吸ふがと水も、すつかり手のヒツにしみかんだらう、

午名四時から一時間、直と、浅倉、松井、若登の三人、大野政談の中、

天一坊、紀の国屋又在衛門仕の中、振袖大事のくどりの一席を話す

三人とも感心して聞かす、江戸時代の人情、仲々捨て難いものあり

三月十八日(土) 俺と古ふ人間が一ツの強い個性を持つて人間で

あると云ふ事が分つた、先日の木曜日の三好叔師との懇談会

の席上で、弁じた俺の言葉は、確かにそれであつたらう、

と古ふも、久々津姉が今日「あの時私は確かに細野えんに対して、憤り

を覚えたよ、然し家帰ると友者してか、細野えんの言つて

事が、正して、私の打出し内題は、確かに「愚らぬ内題むちと京

事に気がつたよ、と、細野えんは、愚ふ事、卒直に、權し陰しめず

ホシく、言ふ人で、お代り、陰では言はぬ人、お腹の中には、何れ

ふ人、でもと京事が分り、私の命運、知つて人の中は、珍らしい、性格の

人、と京事を、令り、と、言つていさ、此れも、俺の、江戸の子的、な

性格、かも、和ル、ズバリ、卒直に、言はぬ、と

気が付まふ、但し、その、悪意も、革命も、つて、人、内、ふ、ん、ど

単純、と、云、ふ、単純、でも、が、此、も、俺、の、個性、の、一、つ、だ、ん、ど

今、と、云、ふ、は、如何、とも、不、し、難、い、個性、と、結、ぶ、つ、て、い、い

今、度、も、余、す、一、日、で、帰、る、が、今、度、も、氣、儘、に、風、吹、く

ヨ、に、休、食、勤、習、して、来、や、う、風、來、坊、と、自、覚、して、それ、に

徹、有、る、事、一、つ、の、帰、有、中、の、目的、と、して、美、夫、え、ま、ま、い、

一九五〇年九月十二日(火)

思ひ直して暫く途絶えていたペンを取る事になった

六月の朝鮮動乱と契機とを、又しても嫌なほど戦争と云ふ現実が我々を包みはじめたのである。そして七月八月とソビエトと北朝鮮が

北朝鮮軍とアメリカと主体とする南朝鮮軍及び国連軍が血なまぐさい命の争鬪と繰返して居る。そして国連と云ふ名目の元には日本は保全と約束されて居るとして、自衛と云ふ名目の元には銃砲を持つる警察警予備

隊なるものが募集され訓練されて居る。国連の協力が日本の現実の課題となる風潮が殆んど支配して居る。然し、僕の殆んどは日本

人か無神経無感質で有り風潮に流されて居ると思ふべきでない。生きている。現実の昨日の命の糧を得るためにこの宿命の中に身を

置かざるを得ないやうな。生きている人は人殺しの武器を取らねばならぬのか？、この辺に現代の懷疑があると思ふ。

無神経で只飯を食ふ人々が羨ましい。インテリの弱さ。戦時時代に於てはインテリの悲劇は、考へて飯を食ふよりも多し。

実際の肉體と昨日の命の日本は、何処へやしのか、山原の中に生かす敵を考へずには居られぬ。

昨日より授業開始。診断学及外科が入る事を定習と併せて八時半より五時まで、全く一通り講義と有り、又して医学士

士の一死の行進である。中一回生に試験は、オ一生理を除き殆んど合格の見せである。この秋と生かす読書に運動に頑張りなう

娘子の口が二段階に達すると書きた。この夏休みの約束は、とへ

のやうな形でも果されたい。愛する事の表現である事、口で定めてゐる。娘子が不安なら、水はリリーベリ、通つてゐる。何と云ふに、是らね

僕に幸福である。娘子の愛を信じてゐるだけだ。

九月十六日(水) 静かな秋である。暮れは早く、秋の日もとつぷり落ちて余りに静寂の秋の宵である。久方ぶりに感傷的になる。

人生五十年の早かたにして、今前途に果しな希望を、と雖も

の悲哀と云え。女同順三の生きた限りも、人々の扱がかりて呉れを
あたるかい心は忘れず、思ふに、僕へ来てから、幾人、人々、斯うして思ふ出の
人の中へ加つていつを事知らう。十九才→二十才、八年間。札幌の春
は誰に比べても恥しく、金塔、打建てを云へやう。

美しい縁、街、札幌。そこに繰展がられた。眞理探究の八年間は
中二の故郷札幌の思ふ出と共に、永遠の澄然と現へり。あかぬを
僕、これから人生を激しく号水の事であらう。そして、来り去りて行く
幾人か、この街の人々の幸福を祈り、語り、ひららう。

又しても、ストップが燃え候と云ふ。嚴肅な冬。理人、一歩々々
この街を去りて、燃え候と云ふ。過ぎ、六月、九月、短く、櫻葉の
幕を閉ぢり、人々の聲の交り、来り、去り、次、櫻葉、準備に入る。冬
雪は降りつゝも、そして、寒さの息をひく。

然し、春は来りつゝも、——(内村先生、言葉)——
中に、人生の嚴肅は、この街の人々の味をひく。

十二月十八日帰省して以来、六月二日、出京、迂約一ヶ月間
之学期の疲労と完全回復し、再び帰札、去来を、
故郷の暖まらぬ人々の心、感謝の地、
持て、安んずる。娘の、細やかなる愛は、
しく、フイトと呼び、怒り、呉れを、
只、余は、愛の、情の、中、
に、僕、は、最大、の、生、
愛、情、は、
か、こ、ん、な、も、の、中、
して、不、甲、其、
又、
い、も、あ、る、

二月十一日(月) 第二聖日

昨日は衛生を休んで猛ダツクでスケイティングに出席し
で今朝は呈首が痛い、九時過ぎに日曜会後
出校す、引続き礼拝、自修の出席す、

午名は中華科礼拝及分級、便徒行伝十五章
のエルサレム合談の話を、世界伝道のオ一の
際、オのありし、割礼の肉體を執り、パウロ村
バルサバ、論争の始り、エルサレムに於けるペテロ・ヤコブ

の具解、又それの基くアテオケの書簡を執りて
そとくや之に伝道の本奔の経過を述べ、

そより、此一時約会後録を記し、同くで座談会
と行ふ、本校側、池田教頭、吉井、月居、安井、安井
上田、木村各教師、助教師、の教務主任の
小室が加る、四時三十分解散、奈良良只親拜

夜はボーカーに興ず、十一時迄三時向行のし、
結局僕が四十二点満点、最後の追込が差功
二位崎子えん、三位吉野兄、四位加藤女史の順

来し、日曜の夜を過ぎ、又良のさや、
二月十二日(月) 衛生、細菌学を了る、退校す、

早速三十点、内也、原芳賀製スキー高級品と擔ぐ
寺口山がレンジに向い、先ずニセコ行のトレーニングとあつて
はま心地の伸をよし、一丸に寺口山の裏山へ抜けて下りる

途中、吹雪に滑りにスキーをとれて一回転倒す、
四時、栄養食に到り、小森と遊ぶ、又食べる

豚汁及豚肉の味質上乘、彼の考え方の變化
は矢張り、暖徳だと思ふ、この七面倒臭い社会に
孤高を存する、日は困難が、リ、へ、に、も、然、り、メ、ン、生、に

最善善を成さる、偽善の限り、不可能な人

二月十三日(金)

例により八時のバスにて登校する。婦人科・薬理二時間にて二時迄講義。それより南下する。薄野新世界

松屋にて川原・井林・鯨岳・松井子と落合小。シヤンソン集

マニアルスタン等開くがどうもシヤンソンは飲んだ時むるいとびつりしよ、

尤も長靴と口で喫茶店に袖そ習う自体がおかしいのだ。ユーピーも不味い。M・J・Bにまがいものが混って習うから。矢張り

新巻のモカ・ホンは良かった。どうもニラしく街に出ると思ふ出と

最之初とこぼる。中村や。最後の身の不ニヤ。手前には

娘が坐るやうな気がする。今頃何して習うや……。

それより、帰れる盛装を脱ぐ。一応見せる映画より

上京女子の好演技。日アフレ松園共校の一面と拍入ひある。雪の中も最後バスにて帰る。マニアルのり冬生活の一頁と

なるおぼ眼目う……。北口の生活は草綱が。いそくと背中

と丸めて家路の多か人の群を見るとき……。と……感ずる

昨日、今日はと降る雪だ。つい加減はくと米水あいと住む人。日

か一言哀さうな。

二月十四日(水) 昨日の雪を朝からゆきと晴れた空に太陽が映

そまふーい位だ。内科各論・病理・細菌と四時迄講義あり

四時五分を帰る入浴。又ワリとストーブの側で読書又良哉

東京は又か暖かになるを喜ぶであらう。

二月十五日(木) 報道に依れば東京は昨日更猛吹雪に

能程氷を積雪。板は及びとか。防雪設備のない都民ら

は慌てふためりたりであらう。遠かには札幌より快哉めいた

平安を祈る。都民大。万の交通機関がストップした

の初めらさむかし。賑やであらうと想像するのみ。

厳格な世界の生きるとは易い。ワタシが。冬観的

に於て此れ程おめな。い。況して四方極の生き方

が一方のには此れに似ている時。怪れむ。

初き 從姉が世帯を研ミテ了日 嫁しい 本當に氣程に 果しく
落着き 時向が送ルル一は 家の甜水と云 僕にこそ 大變
感謝の心をおよし 終極の事と仰し

留考生の夏多士んの内務口つその信日記より

二月二十五日(月) 社拜使役員合會 十一日の教令會議用催の

件に就き審御す 北星・細川牧師招聘問題は役員合會の
空気が大體異論をいやむ者 要するに 琴似教令の自主性を

左右する大内野道と云ふ方も とも少し 熟慮をとも 良いたるに
うな 茲 午後 中身科 便徑行依 バカロオニ次信正と了

小百合合會の女學生連の卒業生送別ミーティングが 教師謝
恩會を兼ねて行はるる 可成りい 委員連が 小百合と憤ま
る 合の形式が如何にせよ その志をわけて 立次り

上野 河崎さん 佳代子さん パースナイのお招きを受く

久方をい せふえと一落に 果しい 不祝の 少膳と 戯れ 種々
果しく 中々ハハ 半過を 矢社する

留考夫々の仲性と持て 良し 仰子さん 仰りあり

二月二日(金) 株一 日が 経てゆく すかに 帰郷を以て

一ヶ月も 過ぎて了つた 講義は 今月中に 終へねば なるべ
各教授は 天々 時日 超越 への 熱の 入り方 である

我 國 細 菌 學 界 の 大 御 所 中 村 教 授 も 在 年 で 傳 年 まで
も 一 代 の 名 講 義 師 旬 日 で 終 り と 告 げ る の だ

すかに 留考 校には 留考 年 末 の 零 圓 氣 が 漂 び 未 だ 例 年 の
乍ら 人 知 れ ず その 空 氣 の 中 の 一 人 で 有 っ て 思 ふ と 落 着 け ず
や ぶ ぶ ぶ の か ぶ ー い 氣 持 に なる 娘 子 ぶり 便 り あり 未 年 の

ハイラーテンに就き 大分 感懐的 文 筆 を みる 香 子 姉 の
ゴールインを知せて来た 幸々 初る や 切 ぶり !!

今日 手 本 齋 屋 と 又 逢 小 日 ま と 見 子 今 度 政 意 心
その 操 念 を 述 べ たい の だ 今 日 は 何 う ゆ う 風 の 吹 ぎ 廻 入 入 せ し ま

三月五日 (月) 日曜は八時より五時まで、お水やニ水やと教会

関係の奉仕に了る。今日日休養とする。午前中は

2回りと読書、就床し。午後はスキーと稽古を寺口山へ

時天の晴れは日全く美しい。アイスバーンぶわく、フラスト

甚し。回転に骨が折れるが、転倒も又良い。転倒し

て、陽光に映える白雪は、教を押しついで、手て雪面

を撫でたりす。気分爽快なり。

昨日長兄より来信あり。次兄のハリー君の問題に付くは

「事此此にまを日、二人の結婚問題の紐と。結婚をせよ地示し

吾々の吾々の力に。母は母に夫の力刀とゆい地不し。いしと

重なるに残るを。教養の不足。吾々の融合性の問題にとも

見、努力と諦観の上にも。解決するのさう。

早速返すこと。教養、世目質の女性の、お水やお水は

お水やお水は、立った程、人、り、お水や、お水や、お水や

熱く、育み、導き、お水や、お水や、お水や、お水や

お水や、お水や、お水や、お水や、お水や、お水や、お水や

平甲「あ、一句、キヤバジンも要の手を引く墓参り。」

上野ホームでは、婉子・田鶴さんの出迎へをうける。例のフラウの

出迎へを受け、いそぐ、としゃべりながら、竹中と別れて、新宿に出る。

中井や、約二月ぶりぐくつまで。小田急に乗り、鶴川へ。

此處に三日に亘る。彌次返る道中は終りを告げ

名実共に東京の生活に飛込り、口はぶつた次で、

春の故郷の川景は、さや、其口。さる昔を懐に、疲れた

僕の身心を癒す、さる事わらう。

(雪融けの札幌の人々の事、思ふと申さぬが)

最愛の婉子の御中、不愛情は共に送る、肉と持て

現更の心もさる。僕とさる事わらう。

帰省以来、其の内、妹と夫の退き、婉子は、今送らぬ、

不愛情と注ぎ、さる。美し、君は、僕は、二人

は感謝する。命を大事に、さる。二人

は努力と、持て、さる。さる。二人

さるの構想と、さる。さる。二人

さるの、婉子より。又、遠く、さる。二人

に見出さる。僕は、さる。二人

リーベン・直隴に、透徹さる。二人

僕はい、凡るをも、留女の中に見出さる。二人

と、深意を以上。僕の生、中、道は、燈塔と、

輝き、さる。海あり、山あり、さる。二人

の旅の、さる。道連れ、さる。二人

さる。君より。さる。二人

僕はい、さる。二人

思ひ、さる。二人

勤ま、さる。二人

四月十一日(水)

昨日の比で温泉天、至には雨の多きところ
四〇〇米下の公館で洗面。センターバスターで朝食。

九時半、修善寺行バスに乗る。遠慮自存と云は

修善寺駅でバスを下車行に乗換る。伊豆の山向に眼を

いれ中の町口を縫そ南下する。今朝は朝霧の先人の夢

と云ふ。二二に起り、二二に滅びる人々。日は言ひ知れぬ

故郷の町に愛着を覚えるやうな気が。バスに揺られて

奇麗な街の軒を眺めたい。湯もやにぬれて古き統りを

話そ習。バスが天城峠にかかる。旅情一河の春雨

が急を脚を揺るはめを。境界を横切る山標をひそくと

湯水で習。山向の杉木立が埋つてゐる。バスが丸か

ニ水から入らんとする。古伊豆の人情を語り始めれば、バスは

コース中の最中の峠に差しかる。その昔は天城越えより

他に古伊豆に入る道が赤石と東は。そ二に宿も人々の情

はさむありと旅の心に励みがおもえる。気候風土共に

直ぐに世々その故業を承る人々の町が。お細いニリ

道と唯一の対外的な連絡路とくして生きたまをの如く。我々の

胸にはさ水の人々の夢こそ。むさかりかまひしそ。衝動の

かみれるのは無理もない事。湯もやにけむる湯の野の

里で小休止。三三は伊豆の温泉町の中。一番山の湯の

噴き出気が湯水と云ふ。三三は人旅の横高の某と

別れる。宿・温泉後に旅の平安を祈る。

平たん不道路と出れば下田街道の左右の視界は

展げて。特有の隆起と持を川が。点在する。蓮花寺

温泉は清流の畔に控える如く。ひびり。バスはスピード

を増え。春の行望の下田へ入る。

春の行望の下田へ入る。知友北川の目を見訪水を第一の事である

四月十二日(木) 水々しい梅葉が陽光に映えて昨日に
 打そ交るを快晴の山はまに点在する夏みの人の色か
 まるしい。身揺れも早々にバスに乗る。妻もあつた。
 下の湾と右に見て白浪海岸の絶景に昇る。
 東伊豆臨一の風光とあやま曲る海岸線の岩の上に
 松の緑が打つよせる白波に映えそぬ。海岸線とま
 道路はうねりくねり。御夷とゆへバス。窓が三人す
 かりく々光るも美しい。流妙な運轉手のハンカ
 ンに心もふがういつかふ時の経つも忘れる。乗降する人々の
 言葉にナマリと知るも娘の気持にふれる。
 河津港と過る頃、バスが川が曾我兄弟の父河津三郎の
 古事と語る。信統のまがいらにまき。菊伊豆の血を継ぐ
 五郎十郎の兄弟が宇余曲所の末、仇討と成道ゆくと京
 事も背けることである。洋上に浮かぶ大島は左手の屈く
 風情が車中の吾々を招く。バスが川。唯上大島市が
 まく低く、屋を引くも空には懐水てゆく。昨の天城路
 とお違つて、天降の故もあつた。のどか海苔コースである。
 稲取の町へ入るその小休止も、二時頃五ヶ分川に降りて町を
 向も走り入りバスは、女川を迂して、片瀬海岸と通り抜り
 五ヶ分(一)目的の地、熱川へ着く。歌なり海苔の下り下
 十五分、相模灘をまともに見下し、海岸の山陰に大田
 道澤が群見しをのりぬ。熱川温泉の旅館がズラリと
 並んで、打ち寄る娯情に對しては、町の右端の海岸の
 岩屋上で中食とする。じっくりと煙く、陽光はまに春のもの
 ではない。夕方より海苔の景色にすなり南に水て
 岩の上は標的をつくり、小石を投げつけたりして遊ぶ。
 温泉旅館の直前、この運轉手を消夜にまよわぬ。
 町の中央、橋の夕モトの土産物売場をその娘さん

の情に惹きつけられた歌待と愛くる。 Tear room. 愛する人
 さま吹く潮風に紅潮一色 歌がえりよ
 五言か三言に 選り出せる心内 どの心もは。 二り端り 雲間瓦
 に居合し人 どの心もは。 どの心もは。

水程 人々の善悪を 疑ひ見る程 晴水渡り 春の空で
 多 旅のよき 人情、機微は 人の善意を 玉に出し
 してしまふのが 旅中(者)に 何で 悪人が あらうか...

人の世の 寂寥とそのまじり 縮図した 旅と古小天然色の
 スクリーンには 留水合小人の 人の心の 翠空線に 心を歩か
 孤独の強も 人の 影像が 吾来して 構成する どの心もは。

旅の 旅行の 人に 何で 悪人が あらうか? 宿一水は
 弱け水田こそ 旅に出る 消えたる 心の 灯を かに 立てるが
 毎日の生活に 人の世を 和らぎて 忘水かけを 人々 旅に出給へ
 せし 荒波立ちし 世の中に 孤独と 思ふ人々よ

より 己が心と 和らぎ よき 旅の道 運水と 動し 合はるは どの心もは。

一 越山に 在りし 四時雨 羨む かる バスを 拾り 吉田に向ふ
 八幡野を 経て 吉田に着き 一碧湖への 小径を 辿る どの心もは。

期待は 友と 伊豆と 吉田 歌未術と 控えたる 事か 俗化も
 甚しく ミーヤン俗。 遊蕩地と 化し 何と 何と どの心もは。

十前年の ロスニヤク どの心もは 出に 浸る 竹中。 心を 察す
 浸語を ゆく 風俗の レガスタンと 質する。 どの心もは。

フランスより 如く 都合の 風俗と 田園の 風俗とを 夫々 確別
 と 両者の 浸入 混和を 許さぬ 人の 善悪も どの心もは。

稗史の 目を 下り どの心もは 相当 離れ 地を 離れ どの心もは。

田園 風俗に 浸るが 都合の 發展と共に 如何に どの心もは。

俗化を ゆく どの心もは どの心もは どの心もは。 直捷の 陶器 どの心もは。

どの心もは。 どの心もは。 どの心もは。 どの心もは。

解は永くない。此海道の阿寒の如き、終大不天の如き境
は、其の予こそつとて、運命をい、出来得水か、東不近道に
も、大自然そのまゝの、環境を現して、まゝをい、

そ水こそ人の心、自然に還水する、フアター、●と云ふに違ふ、い、
湖畔、と出て、伊予へ出る。今迄旅程中、

難問やまを、伊予不日、浅倉の、昨日、交渉により、●波の
フアターの紹介、日新泰（客を去るも、元の待望の別荘）
へ、海、予想以上の、快適不場訪ひあり、加へ、浅倉の
フアター、全部費用と、情早く行そ下まるとか、フアター
とあり、予算の余り、一級酒を、湯上りの、酒水と、癒す、
舟前、右にくつろぎ、旅の労を、互に、おぼらふ、

それより、酒、然と、何うも、都合、聖化術と、何う変ふ、い、
遊樂の巻を、歩、不快に、おぼらふ、意見を、便と、古摺
らふ、トヒニ、ア、しるを、温泉、プールへ、入り、猛り、こ、●百来
の、コロリ、ン、●消、殺、甚、い、け、い、心、地、を、ろ、ろ、水、示、り
帰、ま、し、名、貴、夏、の、ん、に、古、教、を、打、つ、つ、明日、の、大、島、行
の、スケジュール、と、打、診、す、

四月十三日(金) (晴) 今朝、昨日、目と、復し、入浴と、又、眼、

連中、得、立、の、スロー、モ、レ、ン、カ、始、ま、あ、や、不、く、八、時、手、出、帆、の、
あ、け、の、丸、に、内、に、合、ふ、南、西、の、旅行、団、の、連、中、と、同、船、と、ま、あ、
群、す、香、肉、氣、と、壞、れ、を、か、不、愉、快、不、り、

川、奈、の、コ、ル、フリ、ウ、及、お、テ、ル、が、快、晴、●、に、映、り、海、岸、に、
輝、く、の、も、美、し、い、く、つ、ま、り、と、上、方、を、浮、出、を、お、高、き、の、
麗、々、客、が、漸、く、い、り、出、を、海上、に、ロ、リ、ニ、カ、る、船、屋、が、り、
附、め、る、●、遠、く、天、城、の、遠、景、が、漂、然、と、る、春、朝、す、叶、

の上、に、な、だ、ら、か、不、錦、と、画、り、と、浮、ん、ぶ、る、相、当、ロ、リ、ン、が、
す、れ、ど、も、津、軽、海、峡、の、猪、者、四、人、地、の、固、疾、美、の、

黒いとしを巨大な流石の蓄積の上をカラスか鳴きわめつつ
 飛来する様子は正に地獄の探相なり。それを見渡す下ら
 振り鏡と増強する。山内おふいせで三ノ谷を引返す。
 帰途の元おへのコースを下る。鳥居の話を約一山内半
 の日要する事多し。猛烈な勢で下りにまのせて
 駆け下る。各谷やのアン達が目と回して驚き目を
 に三の元村のハスに約五分前に向に合つて。頂上より
 ニニミの肉約四分。砂山を降りホルル。如く九九曲り
 を下るを誤り。バスで早田塔に降り出帆内降のあけほ
 の又りに駆けニミ。テープをその名残を惜みアラス達に
 別れを告げて、船内のテラスでサカ一の極を飲み具飲する
 伊東着の由半丁度。落日が伊豆の山を撫でる如く
 照らす。沈んでゆく。更にその水が伸びて船室の波が来るに
 一月の清遊と閉るにふまはる。其もふり。
 伊東に上陸し、船のハルを宮込め。宿所に至り。
 入浴し、船中一日の回遊を日陽に互に語り合ふ。
 船中會堂で乾杯。その味正に百万兩ふり
 心でしのカレライ入に會堂を充ち。何も成りしとふし。又成
 事とふし。勢い各人各村の思ふはふり。勢いと
 山本ありうら。浅倉ありのらふ。ポテスタンの内野を出て
 議論百出する。日陽にしがたし更に紅湖をせて山本の
 カンリツの牙城に迫る。今度のエリア昇天。船内を正す
 に入りて漸く止む。吾にもどる時は山中浅倉は風呂
 に入り。山中はもう床につくをうい。懐き二人は湯槽に入る
 全く迷惑を極め。解着ひある。ガキもふり。
 床に入り。浅倉と私る。懐にも落着きしを
 カールランドの出来をもうい。もう少し経つと紹介するも
 懐うい。懐を正す方に一寸成心する。

四月十五日(日) 七時半起床入浴。庭のバルコニーで朝の

大気と深呼吸。今朝。會徳が増えたと事を喜ぶ。健康あり。そして四人の日陽けしと顔を見。

浅倉の如き日及にえむりし。道に日備習習者。如き四人。面目ふり。十時半伊东芥の帰途につく

車中。種々語りをもむ。漸く疲労の色濃きものあり。又 思学むも事や。時折窓外を見れば 然るも。

合計 四洲五日。壹千七〇〇内の豪華な旅行を了へし。吾々凡庸坊四人を載せ。湘南電車は 今しも 熱海を

昇つて 海峯線をすくやうにして ひとまりに 東上してゐる。旅はよき哉。旅先の人々よ 幸ふれ!!

吾々方連、平安と 幸福を 祈らねばお水不、

度にはお水不ふいひあう。吾々方連の吾々四人に

お水不ふいひあう。吾々二人の幸福を祈らう。

湯もやにぬ水。伊豆の山々よ 湯柱たついでゆの所よ

そに 活き人々よ 不~~...~~ 祈らう!!

風来坊の心と 諒とせよ!!

旅先の人々の人情に接し時程 嬉しうはふ、い
だから 人生の旅に出る時 社会のれこの人なり 爾れ合ふ
お互の心を 和やかにあうよ、

それが 旅を愛する人々の 所似である。

野村談合 (異談) 取 若四月十一日

若見次 (小島招付) 江中三人で

内題の人 太平鈴子史に合小 (若見次)

由 (金) 在若見次 千高申ナス (若見次)

午若三の四ナス (小樽) 一行 一休庵主人

の痛飲・快食・狂談 江中三人の春宵の小樽の街

と散策も 又佳き哉 夜深ま頃 卯子姉

垣と乗り超えて 宿泊

且 (五) 早朝七時半 帰宅 S.S 春のクマクマ

北大原始布の春風にのり 果一三 プラミック

子侯達と飛んわり ぬぬをり 唄をり 果一三

大 (百) S.S 礼拝説教

午名 校長歓迎 兼新任教師歓迎 親睦会のための

晚餐の料理調理 午キニス (月居) ヤキトウ (細の)

スーパ (中) テザート (清田) と 各男子教師の本末の

腕の誇りと奮闘と 女子教師と奮闘のり

種歌談 持歌 彼若十時半 散会

以上がその大略である 目下の内題は就中 二十九日の森

のり (一) 所富生節子史の内題を 即ち 昨は小森光の

書簡が来り 文中に 僕の仕事が記されて 在り 殆ど

その文章と 読んだ趣に 大分 細野に 惚れを 覚

フアト イニス (一) レオン (一) 末を 念の 心は 相当 怖

その点で 貴君と 対し 珍妙 怖 怖 怖 怖 怖 怖 怖

おれは (一) その 帰り 途 途 途 途 途 途 途 途 途 途

僕を知る 処 (一) 小森 節子 史 あり の 内 題 (一)

僕 能 度 日 (一) の っ っ っ っ っ っ っ っ っ っ っ っ

塚 本 史 (一) 彦 彦 彦 彦 彦 彦 彦 彦 彦 彦 彦 彦

事 以 此 (一) 彦 彦 彦 彦 彦 彦 彦 彦 彦 彦 彦 彦

事 以 此 (一) 彦 彦 彦 彦 彦 彦 彦 彦 彦 彦 彦 彦

夕刻の音井兄来訪。仰の博覧強識研究家又所
 の件も知り、仰の信仰内容、S.S.の著作的不内容
 教念・日本基督教団の内題、物師の内題、果ては
 T.B.の内題に至るまで、三の内題に亘り、又カフロンと
 仰の習い、在り方、予々今後の活動には大に好意が
 持たす。好漢音井兄の偉大に功を仰ふべし。

五月十一日(金)

四 医学部三年自級コンパ 於円山公園

午前十時半より痛飲開始。穿年一博覧強識
 此処に至る。最喜スタンプを揃え、コンパはクラッシュスに
 達す。四時 於公園内、さぶえさんふり
 松井、勝目、竹中、小島、勝井、浅倉、井林、計八人ふり
 山都を彌生の雲、紫の花の香、浮不、饗宴の甚延!!
 我の枝の先人の植えし櫻花爛漫として
 逝く春の酒正に千金ふらん
 八時半解散。さーもの大狂宴は終りとせし。

五月十三日(日)

母の日。于在 子供会及座談会

盡く多き母の愛に感謝と、赤いカーネーション
 に故郷の老母を偲ぶ
 母のよ、健在不水!!
 この日、母に便りする

幼い子供達と、母を偲ぶべく、その感謝の念は
 子供会の雰囲気、神井おそのひき

五日午(七)昨日の大掃除ですかり情死まで

琴所行の春香繁礼の夜は 拙室に用ひ水と香を合
後 面影三四郎の香の三よひを願ふ。琴所のお祭り
の時、取得の斯くして 跡外に映画をやす水も「ふり
今、礼儀は安に美し。 拙人、構内より見る
景色 拙中。 拙人、エルムりの有りにみる。白雪の
疎しと手拍りの運筆は エロティックなふもあり。

アコヤ並木の礼儀の風物詩も悪くない。
拙人遊字の年々管理する事節の事。

先より遊字の拙人、拙子の来信より

その要旨は拙人、周囲への情死を覆水も二の舞、
いとは返すべくもありません。 拙人、覆水も二の舞、
心よりとこで

拙人、情死にも耐えてゆくことなす。 心よりとこで

拙人、貴方と拙人とは耐ええれる一気か。 今考へて後々

拙人、拙人の情死、貴方の愛情す。 リーと古ふり、何か

この三ヶ月強く生きている。おから物言え老つてきて貰って
今の僕にとそ愛を承るべし。昨日は苦痛のから。

(白濁結核と云ふ多クは抜えて)

僕も十日間で又分度そ来と。何れも愛情といふ人ふものと
自明と云。 轉機を乞ふ。 遊べい。

まあ、ゆきり、あせらす。 けうきやと云ふまゝ
愛情の内約多し、 御居を 如きものひきいて...

五月三日(水) 今快通不季節だ。 斯くも此園の

風物詩の中へ生活しむ。 何れも忘れなくふる。

只、大目の中へ呼吸し呼吸を満足に。

自念の事外喜曲の生きたる。 不図の料か!!

腕子に申渡さぬ。 抑ふ氣がな。

然し、忘れやうと云ふ。 ぬふ、い、男力も知れぬ。
それだ、良つた!! 運入 順天、一命を失ふ勿れ。

今日の午前中、積り了つて、 放射線治療

を重体で、大事件起す。 即ち、 辨当の倉庫

の時、月屋を通りかかると、 藁中へ呼ぶ止め、 肥中

を急行入ると、 醫師印中夜、 湯地常

は星と突止み、 泥沼の中へ転倒し、 新瀬のガール

カボンの両足と膝のう下を泥水に浸す。 怖く、 臣化

の印屋へ行き、 水浸を再三、 雨四。 有り、 不格恰

ぬり) 日見物ふりえ。

三時の列車で帰宅。 来り、 吾向え、 長唄を播古

上町迄。 相当な暑さ。 消我甚し。

夕會後、 昨日に接す。 バドミントン。 依止と不敷の、 成

操めず、 入浴。 九時。 言持と一局囲碁。 取。

良、 ちよが、 良、 遊びし。 一はふり。

六月三日(晴)

早朝六時起床。直に駅に駆けつけ、吾々合主催の
蕨取りに参る。即ち、松喜居者不リ。

夫々南々、大中小様々の容器を肩に担ぎ、果、

六時半分桑園駅。初め札幌線に乗る。

石狩の原野の静けさ。一世紀前の汽車が行く。

金のエゾゾライカあり。一駅毎の吾々の停車も

此の地には希と云ふを道中。口を動かさず

何やら地へり(笑)かまめいさる。司に満腹。九時

予前、用事。月形駅に到着。それより、帯川製糖

月形工場畑長工藤田伊次(おぼろ子えりの四男)の所蔵

のトウモロコシに乗り。一路、自給地の蕨叢を地目指す

途中、同工場の従業員との交談も行う。大に喜ぶ。

自給地には、蕨、落、ウド、エヒ、思ひなく、好む

の収穫を得。一同満腹。又且一冊の和紙

書きあふと、一冊の和紙。それ、懐談に花が咲き

名前のエッセイに入。愈々、待望の工場長との

コンパあり。ビール、ステーキ。それ、おぼろ子の地産に

おっ党。日党。天々、その意を充す。

靴中。蕨には全く興味なし。福島、小生の二人

前者より。エーッ、エーッ。良き一日なり

そあ上時、九分、帰途。一、駅。鈴木

幸理兄に会ふ。予中。よもやまの談話。思ひ出

話にふけり。七時半、桑園着。油の月、蕨の枝

の瑞穂。新製のアールバート中不リ。

琴似駅前には出迎への会費。迎へ、一、同

物持。会費。エーッ。エーッ。エーッ。エーッ。エーッ。

家路を辿る。その帰途。幸理兄。エーッ。

四時の汽車で帰る。米多し且味お播古。
六時より前田先生の演(中村殿内一行)を観劇。
東田夫人と内一編あり。余り面白くもなし
ざりとも。帰る元にもふらぬ。芝居がたつ。

六月八日(金)

昨日より北海道医学会 札幌より日米医学教育
研究会の午一〇——二二日まで(南米もく) 学校
は神主の日のついで。傍聴者の日つきあり。
即ち今日の一日休養を。即ちの相陽の始として
終日 書きより老くより 殊より 取らるる。
妖子より 手付あり。

理花の書の方の心の中は私に社としての憎しみ、なげき
一あると思ふを。及げ捨てる。皆に「御幸福」
と書かれもお気持が苦しい位。いえもう何と申上げて
私の粧ちを解きいそげたい。存不元おいませ。
唯一三〇申上げている。今もなお貴方に対する私の
愛情一叙を申しませ。再叙は専らりません。

貴方がいかに能く度と云水でも決して私の妻といつても
ひやう。二年内も持つついでを今更捨てる。元ははる水
より人。勝手にお便りませ。お返すは望みません。
おとむけお返りません。とせり。
愛育研究社(日赤側)の研究生と入所しよ由。
妖子よと云で漢着ませがおまをやうが。あの性格で
實際の誰か年々の妖子の生活では。可哀想をなう
なかつた。おとむけ。お返り。一杯の
生活も。これ。自己の。残像を。お返り。限り
良き成長を。お返りません。

御幸と幸福と。お返りません。

礼拝後、小バザールの執事、婦人会より聖書投書あり。
控室内善不衛在にて十三日に奉致持越とある。

晝食後、小倉後、運動会の見物。降雨とある。
役員席を晴山、沢長、奥田夫人（PTA役員）、工藤兄
と見物あり。降雨の中を元氣よく廻り廻る子供達の
フットに感服あり。帰途、河崎さんへ寄り、印地ま
にある。リプトンの香日久一あり。佳・文・美・連中と

オハシキ、おもしろい、怪談あり。トリーニグ、あり。
夜は、秋の降る春風の音と聞え下ら。之又久一おもしろ
いと、縮く。おもしろ下へ降りく。お茶、トランプ教授

春風の音と懐かしく床につく。十二時過ぎあり。
六月十一日（月） 依りてと降雨あり

日米医学教育研究会合同会式の日お水で休業あり
午過ぎお母さん、又衆人形芝居へお出あり。

何と為すもよく、留守番も兼て、花見あり。
余す一日でオニ回、字工、読書あり。何と手、フカす
佳に世為り日を送るのみ……

雨の合由と見ては庭におり。花壇の雨をいさくく
廻るみる。久しかりて
昨日から登校しおもしろい……道中いろいろおもしろい。

夜は之又久しかりて、トランプを切る。最終初日はホーカー
本日は全然つそよく、三十点沈んで、エンド。
次ナホレオンは中別まで、ラストアップあり

六月十二日（火） 登校。草中、本委員会委員会のシバ
の件でもめる。西村の前で寺田姉と扣で、打聞菜と
練る。結局、全責任として事後收拾に当る。トランプ

この土曜、日南健とす。この件ははじめからケチがついて
いる。く、面白くない。

婦人科田畑先生の例の調子の講義。十時より。

末子中のエール大学小児科主任教授が如く博士の
体躯の平衡度について。内科と合同して講義あり。

午前一時の迄平で帰る。早慶戦を聞く。後半の
慶大の追撃を早稲田遂に逃す切を勝つ。まで

早慶立同率とあり。決勝と争ふ誤りあり。
土曜のハスで。高野公隆子と崇江とと四人で

松戸屋。文東公湯に行く。豊竹山城少様休演
る北と吉田文五郎始め。大夫、人形一屋来りて

仲の。庄巻。且堪能あり。林中。艶妾女
舞衣。三勝半七酒屋の段は見ものありき

文五郎。老れて猶若道に精神も交は敬服する。
本日母より来信あり。予想通り昌彦兄の

結婚式で忙しかりしか。ひも万事円滑に過ぎ
理由にも内満に難いというらう。

夏休中には早く帰れとの事。ひもも本意では
ないが親孝行の唯一は晴着ふれば。老成勢力を

張るも致し方あり。六月十五日(金) 札幌神社例祭 降雨

本日より本格的な夏祭態勢に入る。
午会中 医学会出席。晴途 街を見るに

札幌祭に相当する人出あり。雨降と午会あり
降雨とあり。同情やん方あり

六月十六日(土) 小児科休講 眼科のみ。午会には本日の委員会

委員会のコンパ用、山羊を屠る。撲殺係は荒川
波はを保月居。内臓摘出細のスタックあり

午後七時より。寺田良子姉を以てコンパ用かき

六月十七日(日) 終日降雨頗り。

午後、明後十九日の豊金バザー計画と練る。

スミ、シ、如し (〇印各邦責任者)

総務責任者 藤子長光

一、アメリカ中古服部、蓮田婦人会長以下婦人会バザー

一、相模原部 (星砂糖・豆・茶・石輪・その他...)

〇福島(豊金会) 中村・渡辺・荒川 (男)

一、食堂部 (パン・ミルク販売)

〇細野(豊金会) 小野・河崎・藤子・山崎 (女)

一、合計。月居(豊金会) 及各邦責任者。

一、会場係。細野・月居・福島

一、宣伝係。平野・渡辺

何分急不決定不(充分準備出来たりし)

と堪む。此水も金力と盡くす。

六月十八日(月) 雨上り、利して、バザー準備

六月十九日(火) 午前中晴後、午後雨

前記の如き各スタッフメンバー 最善と盡くす。

幸か、定休期自前も人出さず、好評なり

社中、福島の活躍目録し

午後降雨とあり、中古品部の会堂内は弱る。

客足は、減り、南古島次(特ニ甜空や)

所振、東、小森・奈良の面々と例の二階に上り

月居・福島・小生と五人で、空気銃で標的を

射す。且、賭かけ。奈良最悪の日なり。

二回行な。二〇〇円集る。貯る。ワインとサイダー

で果実とつけ。又柴子がや

それ、大い。後片作り。又又、ジュレパン!

降雨、三輪車の、エント。馬車種のみ...

永ら夕食 七月半より 吾等例会会に臨む

先ず僕が 弊題講演あり。 主題は「キリスト教世観

約十五分に亘る 弊題あり。 附帯して主題に及ぶ

後細川牧師の講演あり。 治で「ドイツカワロン」に入る。

小森、奈良 例に倣して、私を、上の姉又 仰せらるる

壇上を脱言あり。 日居、前日と言ふ弊す。

末に論議をなすと、時向きの 会を閉じ。

二回も、この主題を 究めたまもふなり。

又いかり 活気も 例会ふりし事、感謝あり。

九月廿二日(水) 二時より 登壇

七月七日(土) 七夕祭り

全く快適な気候が 今日この雨も又風情あり。 近学期最終講義あり。 出席す。

それより 昨日来 高菜中の福田を訪問す。

御主人と京中での小母様一人。 いろいろとお話。この来

秋見の件と切出す。 この前、物々符連の望み、

が いろいろお寄り下さる。 いろいろお話を。 結局

参上する事にする。 如何なる旅日記にもなるや。

花より雨の中を 致し至り。 此水又昨日来 割葉中

のT世史と合見す。 西村に至り アイヌラムのどと

淵に足が序々にKの意向と伝へる。 その辺のテラス

老練の手甲を自負す。 ガンキの地ふし

理性の勝るT世史 口辺に微笑美人(たっ

へて威情を殺さんと男力する。 すまに眼光ケイク

とて 寝え。 記憶の血常は奔赤と。 我一言や句

又。 我眼を射る如く 凝視す。

嗚呼。 女性とは斯く強まらるか。

顔そ 男性をものゝ老翁に反有るを覚え。 合見

四十五分ほど 高々と 別れる。

夜は 茶の肉で倒れ如くホーカ―俱樂部例会

手あ。 湯を沈めし。 老練の手甲をプレイあり

七月八日(日) 朝より暑き。 佇しもふし

快晴の中に 聖日を迎ふ

申す所 礼拝入の事。 護教"花と譜"よ

礼拝後 花に 花より 執情を伝へる。

午石日 日曜午後 花の日 礼拝

花より 公共施設を訪問す。

療養院に参り 花より 礼拝。 花より 新園

七月七日(土) 七夕祭リ

全く快適な気候が。今日の雨も又風情あり。
お盆期最終講義あり。出席す。

それより。昨日未考案中の福田先生を訪門す。

御主人上京中か小母様一人。いろいろとお話。この未
成見の件と切出す。この前、物と符違ひ望めふ
が。い。お寄り下さる。い。お話し。結局。

参上する事にする。ま。如何なる旅日記にふりや。

花より雨の中と致し。ニ水又昨日未考案中
のT女史と合見す。西村にまじりアイエラムのどと
湖に足利亭々にKの意向と信へる。その辺りテラッ
老練者なりと自負す。ザンキの地ふし

理性の勝るT女史。口辺に微笑みたる
へて威情を殺さんと男力する。まに眼光を
とて探る。舌の血管は赤赤と。我一言や句
又。我眼を射る如く凝視す。

嗚呼。女性とは斯く強きものか。
翻る男性のもの。老翁に及有る骨見え。合見
四十五分ほど。高々と別れる。

夜は茶の間に例。如くホーカー俱樂部例会
す。お。湯を沈めし。老練者。プレイあり

七月八日(日) 朝より暑き。汗もふし
快晴の中。聖日と迎ふ

礼拝後。Kに作ら。秋情を伝へる。
花を贈る。花を贈る。花を贈る。

午後。日曜午後。花の日礼拝
それより公共施設を訪問す。

痔瘻改口より。時を礼拝。その後新聞

七月十一日(水)

昨夜来の降雨にあり今日一日降り止み
だりの天気である。庭の赤バラが美しい。

霞草は満開。夏菊ももう少いで南と北と
雨に打たれ花が萎び。夕陽愛しい。

この夏休み、お帰らぬと決心し、途端に
胸中を去来する思ひに悩む。

✓ 婉子の優しい微笑の眸に、波水印を身心と
癒やんをいあつたらうか。我家の気儘な生活に

エネルギーを挽回するをいあつたらうか。
おし。今年一年の学生生活と兼

もう少し考へ直して送るべきか。
社会へ出てからには二度とこの持不生活は出来ない。

のぞ。最後の思案の代とと。又、従来
の甘えに堪えてみよ。

おし。僕に此女に嫉妬と愛とをわらうらうら
吾は愛をい。絶対に

唯、僕は勉強したい。強くなりたいたい。
二人は僕も臣者とと世に立つと空を以上

「良き臣者」はなりを。あかう考へよ。
勉強しよ。

二人は単純な心でなれはるの不思議だ。

七月十三日(金) この処の龍城生活は終始一色で
天下の情勢は皆目不備なり。僅かに外來者

新軍を通しその推移を知るのみ。
朝鮮動乱の停戦会談に世界の耳目が集中

とどう感あり。中央国連兩軍の首脳

善喜の解返を希望する。

遂にモリあゆみ、昨(1)日中一訪烟の時一寸話を出し
野球をやりに円山へ赴く。十三時五分のバスで島居前
下車。仲々円山風情も悪くない。

この涼しい日は暑中休暇でも構わない。全く涼しい
すかすかしい緑の薫風が円山から吹き下りて
坂下グラウンドは絶好のコンディションなり

觀光バスが次々とドライブアップして行くのも来り、風景
でも、久しぶりか打つては走りまわって程へ、善喜
のグラウンドと廻り廻るを消費する。

公園入口の喫茶店でサイクリングのどきどき
にのびのびと遊ばすは、丁度。東京から軽井沢へでも
避暑に行つてもやうな気分にある。喫茶店の窓より見える

白樺の木、円山の住居地地の風景、そして山の緑
歩く人の姿、等々。そして我々のいであらうと立ち申し合
ない位、都会の俗塵からのけ離れている。

浅倉が東京から帰省して来たを学生の話と、本当に
悪手れを環境できるとなると、全く悪手れを生活で
きる。井中の中の下名に至り、北海道の地図を

抜き又一新し、既知の道中、全くいゝえふもの
あり。それでも秋涼が気になると見えて、五時半には
夫々泉路を引揚ホをこらうは殊勝なり。

夜は甚だ、それもブリッジ、老婦ふアレイで最
まはるるも、平内十三・七は、まじく、善喜の
の面目更におし。

今日は遂に午前中、二山内のみで沈没あり
川日、昨日の二山のみ、ひと今更、慌てふそめんを
とまろで致し方あり、暢気なゆるへ。

七月十九日(未)晴

才二回学上試験施行才二日 菓理学

先十文日(月)の細古学日先ずヴァリスの山が当り

七〇点確實人(最悪)と云ふ処で 昨年大量八十人不合格

と云ふ文物を射を 何と云ふ 本日、菓理学子日主任真崎

教授おけに文物中の文物 全力を注ぎ 三。学課に準備して

連中も 結果如何? 結果如何? 見事な中に 試験場は

悲壯な空気が漲り、 立刻十時半 先ず時間仔の助手

入場 統て監督の助手五人 最名の真崎主任教授入場

して文蓋を切る。 四向中 全部手をつけ。 一、十五、二、十五

三、十五。 四、十五 とは局 大十五点 (最悪見知り) 確保?

結果判至は十月、辭教士待つのみ。 途甲、計甲と才二農場、ホボラ並大

と散乗し。 又、フウク銅像前で 女子学生アルイトの学内鳥真人

也と云ふやあし。 更には秋のついで、 ニシラで、アタコローム

地見の件 物々望ゆる一見化と 牧場は日ルシゲ下日のクワシ

二人が例の本免の方で、 養養と云ふ。 和と云ふ。 相母も

大変 想像して居る。 和と云ふ。 相母も

晴道、計甲の下宿に至る。 八月一日以降のスケジュールは礼を協

す。 估論出す。 三人のスケジュールの目的が相違を認めるに気が

し。 右の、下宿(ホボラ)より。 バスで宗江さん(ホボラ)より。 風呂で

鏡、一階に入り。 夜は 早日はゆい

城を 塔回しをゆ。 大層汗あり。 文に 体力に疑向

を 持つものあり。 自主して云ふ

ニニまゝ来て 波倒りの 報日 試験中から 猫更 悲報あり

好模 田上百助 城戸 諒の 再起と祈る

七月二〇日 (土) 病理学(武田)試験 自信あり。

夜 小森名にて大コンパ ストームをやる

七月二十二日 夜 奔 一ル五一年度北海道内大旅行

の途につく 舟一次出奔 即 十勝・日高国

襟裳岬(道立公園)を経てアポイ岳登山

帰途 支笏湖にて北大寮で泊りヨット練習

七月二十八日 出 帰 乗 総経費 二〇〇円

八月一日 (水) 朝 奔 舟二次出奔 同行 江中正大

即ち北上にて旭川を経て士別に至り天塩川と瀬河

名寄から興部に至りオホーツク海岸を下り

遠程に出て 家庭を接訪内 後 福田牧場に至り

更に南下して 北見の洞走に出て、モヨロ貝塚見学

休養の後 舟にて知床半島に渡りウトロに渡り

知床半島、横断とラウスに至り 国境の町の緊迫

せる情勢を視察 南下 樺津を経て釧路に出て

帰礼す

八月十二日 帰 札 経費 三〇〇円也

此処の総計 五〇〇円で 今夏の大旅行も幕を閉す

八月十六日 運 送 日 夏季学校南校準備

八月十九日 (日) 十六日より 四日内 夏季学校南校

八月二十日 (月) ↓ 九月の試験に準じて 動き開始

九月五日 (水) 上 病理学(安保)試験 自信あり

リ 七日 木 復生学(井上) あり

九月九日 (金) 上 聖陽の節句 誤別コンパ 於 拙宅

一〇日 土 奔 七・三〇 帰省の途に就く

一一日 日 一一・一五 上 聖着 帰 札

九月二十日(木)

帰省以来毎日の如く降雨に~~な~~たまらぬやうな
夏^真熱^熱おそろいおそろい、^熱熱く久方おりに父郷の温
い手の中で、愛する娘と共にならる日、六月以来の
消沈と一氣に挽回と余りものあり。

娘もこの四月以来の同じに體^體弱^弱するやと極度に
怖れてうら^{うら}ん、^單單^單なる感^感情^情の行^行を^をお^おり^りと極めつけ
はるいものもあ^ある、^子子^子令^令に^に女^女理^理心^心理^理の^齋齋^齋な^なる^るも^もと
し^しは^はそ^そや^やる^るま^まあり、^女女^女れ^れが^が理^理心^心理^理に^にお^おも^もふ
こそと^とお^おり^りと^と茶^茶と^と指^指彈^彈ま^まは^はい^い。
理想^{理想}の^のま^まを^を作^作る^るは、^互互^互に^に理^理解^解し^し合^合こ^この^の力^力を^を
に^には^はか^かず、^愛愛^愛する^ると^と強^強く^くま^まを^をま^まの^のもの^のと^と握^握握^握と^とす
限^限り、^解解^解は^はま^まを^をま^まり。

この日、歸^歸り^り七月の^の学^学と^と沈^沈沈^沈 (業^業理^理・細^細口^口)
病理^{病理}の^の合^合格^格通^通知^知あり、^祝祝^祝意^意を^を伝^伝ふ。

九月二十二日、大^大程^程算^算。

九月二十三日(日)、^山山^山の^の山^山印^印見^見ま^まる、^久久^久方^方お^おも^もす。

旧^旧業^業と^とあ^ある^るが、^杯杯^杯を^をま^まり、^朝朝^朝八^八・五^五八^八お^おす。

日向^{日向}業^業師^師見^見学^学、^七七^七日^日温^温泉^泉の^のフ^フツ^ツツ。

二人^{二人}お^おう^うら^らな^な環境^{環境}が^があ^ある^るを^をお^おも^もつ^つた^たい。

北^北極^極近^近の^の味^味へ^へい、^情情^情緒^緒お^おり、^初初^初秋^秋の^の山^山道^道の^の又^又
氣^氣分^分お^おも^もい、^故故^故郷^郷の^のい^いい^い氣^氣分^分を^を満^満喫^喫する。

二人^{二人}の^の行^行事^事が^が、^二二^二人^人は^は身^身の^のい^いもの^のを^を、^つつ^つく^く、^我我^我身^身
の^の平^平平^平を^を味^味わ^わ、^七七^七日^日の^の濃^濃情^情を^をま^まり。

園^園の^の業^業師^師も、^懐懐^懐古^古の^のお^おも^もい^いの^の一^一方^方回^回え^えと^とな^なつ^つて^てま^まる。
向^向の^のい^いま^まを^を感^感謝^謝し^しま^まり、^七七^七日^日温^温泉^泉の^の同^同品^品の^のお^おも^もい。
お^おお^おと^とい^いま^ま、^二二^二人^人の^の構^構想^想と^と語^語ら^らす。

九月二十四日(秋分の日)

昨日と引続々快晴。 婉子と逗子へゆく。 家中在宅。
叔母上もすつかり元気で安心した。 兼て一丸五一手度
タイトルと目指して 猛練中の健治と将棋を指す。

初盤戦より中飛車戦法が押して、一気には終盤へ持ち
こし。 そのまゝ押してゆき。 早々に健治投了し、再度タイトル
は我手にあり存す。 スキヤキの馳走ですつかりんころ。

九月二十五日(月)

小岩にゆきし。 町中不在。 浅倉帰来し
ゆきし。 訪れ、車中会ふ。 札幌の情報を入手す。

試論発表の時のナッセエも果し。
お水も。 ピカペリーにゆき。 婉子と会ひ、イウ。 読んでしと
翻る。 仲々の傑作。 在羊度洋画ベストワンおらん

九月二十七日(水)

婉子。 風邪は冒さる。 祈回復
キヨエ味。 銀座を不ニヤで町中。 浅倉と会ふ。
銀ブラをして後。 スバル座に赴き。 今西洋ミと噂が出

して、シラビド(ベルギー)と観る。 その内、日比谷公園
宮城前右場 散歩す。 帰途、新川町の上理の老
を訪れ。 大歓迎をうくる。

創麦は美味し。 すりり馳走のり。 大極嫌で
一同ハイパーで引とぐ。 終電を逸り。 浅倉の家
へ泊る。

九月二十八日(金)

セントラルリーグ。 名古屋ー松戸。
巨人ー大洋戦を見よ。

九月三十日。

原野田テニス同好会コートでラケットをふる。

約一月ぶりなぞ 調子出づ

十月一日(月) 大藏祭礼

念々 誤別ふり 三週肉の在郷生活の因ら出と

秘甚 暫きの別れあり

妖子と 岩の夜の語り合ふも 感慨無量なり

熱王接吻の誤別の心は代々

健康祈り合ふつ

十月二日(日) 朝元時三十五分 上野祭

同行 浅倉 行中

聖蹟は遠小憩 延宿山登山 湯の川温泉

四日 朝去の十時分 札幌着

初めの日の 寺の初校授け 臨席講義は出席し

以て 第二学期のスタートとす!!

六日 夜 坊元にて コンペ (鯉・カキ)

七日 対高大教野球試合 (岡山球場)

一〇日 月形への釣行 (月尾)

一三日(出) 教舎の作り直し ありんかやとり 南業

十一月一日(木) 田舎の小山畑に三年おとを合の旧交を新し

十一月二日(金) 病院入院三日 記念日 休婚

翌日温泉 水大分院へ行く 同行 浅倉

町中 新築 井林の五人 例の如く 無軌道五人男

翌日温泉 秋の湯治行と 洒落水ニ

水一瀧本、東洋一の浴場 護備は 咄然とす

湧出量 温泉の種 終焉 正に 日本一有え

スーパールの大工をすいすいつくり 感謝

十二月三十一日 午後七時記す

余は野村内にて一九五一年も終るとする。

心は感慨無量である。社会的には次の如き十大ニュース

が示す如く、日本の行く手の困難はと最難なる事案と
物語っている。然し、その中にもほふふほんとほふかな

平和への希望があった。

何と云つても一九五一年は終つてゆく。そして

新しい一九五二年の構想は成つた！

生きている。遅い。信じて……

一九五一年十大ニュース「事起順」 (NHK)より

○ 亜細亞醫技大会 (印度ニューデリー)

○ マツカシヤ元帥解任 (東京・ワシントン)

○ 櫻木町事件 (福澤)

○ 貞明皇后喪儀 (東京)

○ 追放解除 (金口)

○ 民間航空再開 (東京・福澤・札幌)

○ 電力危機スト (大阪)

○ 台風ルースの災害 (西口)

○ 講和條約締結 (サンシスコ)

○ 社会党分裂 (東京)

講和・日米安保両條約国会通過 (東京)

一 九五二年度構想

元旦記

一 キリスト者としてのヒューマンテイーと 根本とする
 医学者としての 学生生活の 最善学年を
 眞剣に学ぶ 且つ 片寄らざる パンナリティと
 養ふ事。
 一 許婚者 姪子とのリーベの 最後一年とベターハイフ
 として 取^メの^カらぬ 人肉たるべく 努力する事。

石の構想に基き 左記 予定と画つ

1952 一月上・中旬 老介の休養をとる
 一月下旬 帰郷学 スタート開始

二月上・三月中旬 勉学 スキー、スケート

見学旅行 且 休養

教員関係

四月中旬

最終学年 勉学 公的生活を止む

六月下旬

且 健康のため テニス 登山 茶...

七月上旬

姪子来札予定

七月下旬

帰省 実習の傍 夏季スポーツ

八月下旬

及び インターン 病院決定

九月上旬

最終学期 勉学 院仕上り

十一月下旬

帰省 卒業試験準備

十二月下旬

帰省 卒業試験準備

一月下旬

卒業試験

三月上旬

卒業試験

三月中旬

ハイライテン準備 且 卒業式

三月下旬

ハイライテン

1953

一月二十五日(金)

又朝之の訣別の時約束は 何回となく弾リ
返一と曰古の(北)一思はなるは...
二人の月夜を並べて 到所へは 觀劇の宵
夜の更けるまで七折れと語り合つた二人の炬燵
和らから 日陽しと治がて 飛の廻った 冬の庭

手と手とり合子 黙って歩いた 寒夜の道

然し 又 暫一の別水の時の約束は

又逢ふ日は... 君よ多千身水...
君あはれはこそ 音強し 敢然とト生まるとの在
恵子姉と三人で 新宿へ出る せと 東京の街
に灯のともる頃 上野駅へ 向ふ
行中と二人で 一路 北上すよ 淋しい

一月二十七日(日)

連絡船 日暮風雪のため 環航 一日遅れて
今日午名四時半 札幌着 雪の札幌の人と雪
又々も始まる 雪の生活 負けました

三学期予定表

- 一月二十八日(月) 登校開始
 - 二月二日(土) この日までに 挨拶廻り完了
 - 二月三日(日) S.S. スキー 遠足
 - 水日(水) 北大開学記念日 休校
 - 七日(木) 第九クルフベスタート・コンパ 午前十一時 於いそほ
 - 十日(日) 春香山 スキー・スキー行 午前八時半 於いそほ
- 午後六時 在琴似北大生送別会
於 琴似神社口事務所

二月十一日(月) 二のりまに 三月、見学旅行渉外事
白え了

奥秩父主脈縦走計画表

1. 道順:

本大略: 立川 — 氷川 — ~~日原~~ — セツ石山 — 雲取山
 — 北天ノタル — 将監峠 — 笠取山 — 雁坂峠 — 甲武信岳
国師岳 — 金峰山 — 金山 — 増富温泉 — 比志 — 葦崎
 — 八王子

① 詳細: 立川 — (青梅線) — 氷川 — 日原 — ~~日原~~

② 日原 — 江戸沢湖行 — 鞆のクビレ — 江戸大クビレ

セツ石山 — (屋根) — 雲取山 — 雲取小屋 (泊)

(③) ~~日原~~ 日原川湖行 — 江戸 — 湖リ — 大クワ — 小屋

小屋 — 雲取山 — 猿平 — 北天ノタル — 飛竜山 — 大タル

— 竜喰山 — 将監峠 — 唐松尾山 — 黒楢山 — 笠取山 —

雲取小屋 (泊) — 雁峠 — 蕨山 — 古礼山 — 水晶山 — 雁坂峠

— 雁坂嶺 — 猿不山 — 木賊山 — 甲武信小屋 (泊)

— 甲武信岳 — 富士見 — 梓 — 国師岳 — 朝日岳 — 金峯山

大日小屋 — 富士見平 — 里宮 — 金山峠 — 金山 — 増富温泉

— 比志 — 八峯 — 葦崎 — (中央線) — 八王子 (泊)

2. 日程: 4泊5日

3. 経費: 立川 — 氷川 (50円), 比志 — 葦崎 (75円), 葦崎 — ~~八王子~~ (150円)

雲取小屋, 笠取小屋 (無人), 甲武信岳小屋, 各 100円.

増富温泉 (2400) 200円 総計 775.00

4. 携行品: 主食2升, 副食(罐詰等)他, 毛布, 炊食用具 等他